

はじめに

- ① この本は、中学校で学習する口語文法の内容を、学習しやすいように基本事項を中心にして一冊にまとめたものです。
- ② 各章は、文法の体系をもとに構成されていますので、それに従って学習を進めていくと文法事項を体系的に理解できます。
- ③ 一見して頭に入りやすくするために、項目ごとに見開き二ページにまとめてあります。
- ④ 学習の際にはまず、上段の内容に目を通し、基本的文法事項を理解してください。
- ⑤ 上段を学習しながら、下段の基本問題にとりかかり、問題を解きながら基本的なことがらをしっかり身につけてください。
- ⑥ 上段のマークには、注意事項を示しました。中段では、さらによくわしい内容をあつかっています。マークには、文法事項を理解する際のちょっとしたコツが示されていますので、参考にしてください。
- ⑦ 徐々に理解を深め、各学習内容が積み重なったところに、「練習問題」が配置されています。「練習問題」を解き、各章ごとにひとまとまりになっている文法の内容を確認してください。
- ⑧ 口語文法の内容の体系的理解は、日常的な話しことばや書きことばを豊かにするだけでなく、文語文法を学習する際にも大きな助けとなります。常に全体の中のどの部分を学んでいるのかを意識しながら学習するとよいでしょう。

もくじ

第一章 ことば	1	ことばのきまり	4
2	ことばの単位	6	
第二章 文の組み立て	3	主語と述語	8
4	修飾語・接続語・独立語	10	
5	連文節・文の成分	12	
	練習問題 1	14	
第三章 品詞のきまり	6	単語の種類	16
第四章 品詞のきまり《自立語》	7	名詞	18
8	動詞 (1) 〈活用形〉	20	
9	動詞 (2) 〈五段活用・上一段活用・下一段活用〉	22	
10	動詞 (3) 〈力行変格活用・サ行変格活用・補助動詞〉	24	
	練習問題 2	26	
11	形容詞	28	
12	形容動詞	30	
13	連体詞・副詞	32	
14	感動詞・接続詞	34	
	練習問題 3	36	
第五章 品詞のきまり《付属語》	15	助動詞 (1) 〈れる・られる〉	38
16	助動詞 (2) 〈せる・させる・たい・たがる・ない・ぬ〉	40	
17	助動詞 (3) 〈た(だ)・だ・ます・です〉	42	
18	助動詞 (4) 〈う・よう・らしい・まい〉	44	
19	助動詞 (5) 〈そ(だ)・よう(だ)〉	46	
	練習問題 4	48	
第六章 語の識別	20	助詞 (1) 〈助詞の分類〉	50
21	助詞 (2) 〈格助詞〉	52	
22	助詞 (3) 〈接続助詞〉	54	
23	助詞 (4) 〈副助詞〉	56	
24	助詞 (5) 〈終助詞〉	58	
第七章 敬語表現	25	まぎらわしい語の見分け方	60
	練習問題 5	62	
26	敬語	64	
	練習問題 6	66	
第八章 文語の文法	27	文語と口語	68
	【付録】動詞・形容詞・形容動詞・助動詞活用表	70	

1

ことばのきまり ルールを知るよろこび

ルールの発見

万有引力の法則を発見したニュートンという学者がいます。彼の墓には、「自然と自然の法則は闇の中にあつた。神がニュートンよきたれ、と言つた。するとすべての法則が明るみに出た。」と書かれています。

高いところにあるものが低いところに落ちるのはだれもが当然だと思つて、それまで疑問を感じることはなかつたのでしよう。すべての物体は落ちるのではなく、地球の引力によって引っ張られていゝのだ、というルールを知つたときどんなに驚いたことでしょう。

太陽や月の移動・季節の変化などの自然現象も含めて、私たちの周りには、あたり前だと思つていることの中に、常に一定のルールがあるものがたくさんあります。

ことばもそのひとつに数えられます。

問一 「放課後」「きょうの」「遊ぼうよ」「公園で」という四つのことばのまとまりがあるとき、どのような順番にならべると、相手にメッセージを伝えることができますか。

ほとんどの人は順番を間違えることはないでしょう。それは、皆さんがいつのまにかことばのルールを身につけているからです。

ことばにはどのようなルールがあるのでしようか。もう一度自分の使つていることばについて考えてみましょう。

ことばは心の窓

ことばの目的や働きは、自分の考えや気持ちを正しく相手に伝えるというところにあります。そのためには、どのような場合にどのようなことばを使えばよいか、たくさんのことばを知つておく必要があります。

問 お店で店員から品物の説明を受けて、「お客様、これはいかがでしょうか」とすすめられたとき、次のどちらで答えますか。

ア わかつた。これ買うよ。

イ わかりました。これをいただきます。

どちらも話し手の考えや意志は相手に伝わりますが、アのことばよりも、イのことばのほうが丁寧であり、それぞれの気持ちも違つて伝わりますね。

ことばが正しく伝える働きを持つということには二つの意味があることがわかります。ただ単に相手に自分の意志を伝達することと、自分の心や気持ちも伝達することです。同じ内容でも使い方によつて相手に対してずいぶん違った印象を与えることになりまふ。もし、逆に店員が客に投げやりなことばづかいをしたら、どんな良い品物でも売れなくなつてしまふでしょう。

時と場合、そして相手によつては、ことばの使い方によつて、心を傷ついたり、心を慰めたりすることさえできるのです。ことばによる暴力はいつまでも消えないということや、愛情のこもつた一言によつて勇気づけられたということをよく聞きます。私たちはことばによつて、自分と相手が互いに心を通わせ合つているのです。

生きていることば

一般的に、幼いころは普段使つていることばに一定のルールがあることはあまり考えません。ことばのきまりやルールについて考えるようになるのは、むしろ中学生になつて外国語を学ぶようになってからではないでしょうか。文の基本的な構成について学ぶことは新鮮な驚きで、ことばにはルールがあつたから相手に伝えることができるのだなどと、いまさらながらに納得させられます。

一般に、日本語は外国語に比べて、最後まで聞かないと(読まない)相手の意志がわからないと言われます。

例 私はりんごが好きです。

私はりんごが好きではありません。

右の例で、文末に「好きです」がくるか「好きではありません」がくるかで、意味はまったく違いますが、「好き」か「好きではない」かについては、文の最後までわかりません。これは、日本人の奥ゆかしい性質の表われだとも言われています。

一方この不便さを補うために、日本語には別のことばもあります。

問二 次の文の空欄に後のことばから適当なものを補いなさい。

() () 今まで気がつかなかつたのだろう。

まったく どうか ぜひ なぜ

文頭のことばで、この文で伝えようとしていゝことがわかります。

ことばの礼儀作法

ことばには、「ありがとう」という感謝のことば、「うれしいな」という喜びのことば、「ごめんなさい」というあやまりのことばをはじめとして、厳しいことば、優しいことば、励ましのことば、思いやりのことば、投げやりのことばなどがあります。また家族や友だちと話すとき、多くの人の前で話すとき、論文を書くとき、手紙を書くときではことばの使い方が違つてきます。それをルールに従つてどのように使いこなすかは、人それぞれです。

日本人は昔から礼儀作法を大切にしてきました。最近はずつと変わつてきていますが、ことばづかいの上でもそれは必要です。それぞれの場所に応じた服装が求められるように、相手や場所によつてことばを使い分け、適切な表現ができるようにしっかりと学ぶことが大切です。さまざまなポケットから素敵なことばを取り出せることは、自分だけではなく相手にも喜びを与え、互いに関わりを深めることにつながります。皆さん、ぜひより高度なことばのマナーを身につけましょう。

答え 問一 きょうの放課後公園で遊ぼうよ。 問二 なぜ

ひとくちメモ

東北地方で今でも使われていることばに、「(食事を)け。(食へなさい)」に対して「く。(食べます)」と答えるものがあります。住む人と場所によつてはこんなに短いことばでも自分の気持ちを伝えることができます。

1 文章・段落・文

一編の小説・詩歌・記録・手紙、あるいは講演やあいさつなどのように、ことばをいくつも続けて、ひとつのまとまった考えや気持ちを述べ表したものを文章という。

文章は、ことばの単位のもっとも大きなものであり、話し手や書き手の中心的考えや気持ち（**主題**または**要旨**）によって統一されている。

文章を意味のうえからいくつかのまとまりに区切るとき、その一区切りを**段落**という。段落は、文章に次いで大きなことばの単位である。

文章を組み立てる単位で、それだけで何かまとまったことを言い表している一つづきのことばを**文**という。文は、ことばの単位の基本的なものである。

2 文節

実際に使うことばとしておかしくない程度に、文をできるだけ細かく区切った一区切りを**文節**という。

若葉が 野や 山を 美しく いろどる。

右の文のように、文を意味のわかる程度にできるだけ細かく区切ってみたとき、「若葉が」「野や」「山を」「美しく」「いろどる」は**文節**である。

文節は、文を組み立てる単位で、文法上重要なものである。

3 単語

文節を意味やはたらきのうえからさらに細かく分けた一つのことばを**単語**という。単語はことばのもっとも小さい単位である。

花壇の チューリップが 風に 揺れる。(四文節)
花壇の チューリップが 風に 揺れる。(七単語)

右のように、文節をさらに細かく切ったとき、これ以上区切ることのできない単位のことばを**単語**という。

それだけでは単語として扱われないが、ほかの単語の上または下について、意味を添えることばがある。このようなことばを、それぞれ**接頭語**・**接尾語**という。

《接頭語+単語》お茶 か細い こにくらしい す足

そ知らぬ たなびく ま夜中

《単語+接尾語》私たち 山田さん あたたかさ お客さま

りこうぶる おこりっぽい 人間み

接頭語や接尾語がついてできた単語を**派生語**という。

くわしい学習

文章

ことばをいくつも続けて、話し手や書き手のまとまった考えや気持ちを表したものを文章という。小説や詩、新聞の社説のような説文、そのほか手紙や話しことばによる講演などもすべて文章である。

形式段落と意味段落

①形式段落

文章の中で、行を改め、一字下げて書いてあるひとまとまりを形式段落という。

②意味段落

文章の内容によるまとまりで分けたものを意味段落という。意味段落は、形式段落がいくつか集まってできていることが多い。

句読点

文の終わりには、**句点**（。）をつける。句点の代わりに「？」や

「！」を用いることもある。詩歌や短歌や俳句では、句点をつけないこともある。

文の途中で、ちょっと息を切るようにつける**読点**（、）と**句点**とを合わせて**句読点**という。

引用文や会話文

文の間に引用されたことわざや会話がある場合、引用された文を一つの文とはしないで、全体で一つの文とする。

「同感だ。」と男が言った。

「善は急げ」というから、早くやろう。

文節の見分け方

文節を知るには、文を、できるだけ短く区切って、ゆっくり読んでみるよ。

あるいはまた、文の途中に「ね」「は」「よ」とか「ですな」などということばを、できるだけ多く入れてみるとよい。はさみことばの入るところが、文節の切れ目である。

私の**ネ**学校は**ネ**丘の**ネ**上に**ネ**ある**ヨ**。(五文節)

基本問題

1 次の文章は、いくつかの文からできていますか。文の終わりに「。」をつけ、文の数を答えなさい。

それからしばらくたってよだかははつきりまなこを開きましたそしてじぶんのからだがいま燦の火のような青い美しい光になって静かに燃えているのを見ましたすぐ隣はカシオペア座でした天の川の青白い光がすぐうしろになっていましたそしてよだかの星は燃えつづけましたいつまでもいつまでも燃えつづけました今でもまだ燃えています

2 次の文の（ ）に読点が句点を入れなさい。

清兵衛のいる町は商業地で船着き場で（ ）市にはなっていたが（ ）わりに小さな土地で（ ）二十分歩けば細長い市の（ ）その長いほうが通り抜けられるくらいであった（ ）だからたとえひょうたんを売るうちはかなり多くあったにしろ（ ）ほとんど毎日それらを見歩いている清兵衛にはおそろくすべてのひょうたんは目を通されていたろう（ ）

3 次の文を文節に区切りなさい（文節と文節の間に横線をひいて示すこと）。

- (1) 私はきのう友だちと映画を見に行った。
- (2) みんなで近くの森の中の草原へ行つて、そこにすわって歌をうたった。
- (3) ぼくは毎日日記をつけています。
- (4) ことばは人類をほかの動物から区別する最もたいせつな目印の一つです。

4 次の文を、二本の横線で文節に区切り、それをさらに一本の横線で単語に区切りなさい。

- (1) 小舟の上で昼のお弁当を食べた。
- (2) 砂ばくに夕日が沈む光景は感動的だ。
- (3) 満開の桜が静かに散っている。
- (4) 世の中のこともっと知りたい。

5 次の（ ）に適當なことばを入れなさい。

- (1) 最も小さいことばの単位は（ ）で、それが一つまたは二つ以上集まって（ ）となる。
- (2) 夏目漱石の『坊っちゃん』のような小説や、島崎藤村の『千曲川旅情の歌』などの詩、あるいは新聞の社説、または話しことばによるあいさつなどは、すべて（ ）である。

3

主語と述語

1 主語と述語

- (1) 主語は、その文の主体となる文節であり、
- (2) 述語は、主語に対する説明の文節である。

花が 咲く。
桜が きれいだ。
これは 桜だ。

右の文で、「花が」「桜が」「これは」などに当たる文節を主語という。主語にはふつう「が」「は」をとまなう。

また、「咲く」「きれいだ」「桜だ」などに当たる文節を述語という。述語は、ふつう文の終わりにあって、主語についての性質や動作や状態などを説明する。

主語には、「が」「は」の代わりに「も・こそ・ばかり」などが使われることもある。

桜も 咲く。
これこそ 桜だ。
桜ばかり きれいだ。

2 主語と述語の関係

はじめの例文で、主語と述語は次のような関係になっている。

《何が どうする》 花が^{主語} 咲く^{述語}。
《何が どんないだ》 花が^{主語} きれいだ^{述語}。
《何が なんだ》 これが^{主語} 桜だ^{述語}。

右のような関係を主語・述語の関係といい、「主語は述語にかかっている」という。

主語と述語が結びついた右の三つの型は、文の骨組みとなる基本的な型であり、これを基本文型という。

右の基本文型は、それぞれ次のようにいろいろな形をとる。

《何が》 何は 何も 何さえ 何こそ 何だけ
《どうする》 どうした どうしない どうしている どうされる
《どんないだ》 どんないだ どんないだろう どんないかな
《なんだ》 なんです なんだろう なんだでもない なんだだった



くわしい学習

文節と文節の結びつき

文は、文節どうしがいろいろな関係で結びついてできている。他の文節にかかっている文節と、それを受ける文節とがあり、前の文節はあとの文節にかかるといい、あとの文節は前の文節を受けるという。このとき、前の文節をかける文節、あとの文節を受ける文節といい、その関係をかかり受けの関係という。

かかる文節 ↓
自動車がかかっている文節

文節の関係

文節の結びつき方には、次の六種類がある。

- ① 主語・述語の関係
- ② 修飾(修飾・被修飾)の関係
- ③ 接続の関係
- ④ 独立の関係
- ⑤ 並立の関係
- ⑥ 補助の関係

基本問題

1 次の文の主語となっている文節に——線を、述語となっている文節に——線をつけなさい。

- (1) 車が ゆっくり 走る。
- (2) 社長も 社員と 旅行に 行かれる。
- (3) 四番バッターの 彼に 対する 期待が一番 大きい。
- (4) この 地点が ハイキングの 出発点だ。
- (5) 畑の 向こうに見える 建物は 私たちの 学校です。

2 次の文の主語となっている文節には——線を、述語となっている文節には——線をつけなさい。

- (例) きょうも 若者の 合唱が 聞こえる。
- (1) 探検隊の 一行は、夏の 晴れた 日に 故国を 出発した。
- (2) ふもとの 村々の 電灯が まばらにながめられた。
- (3) 『星の 王子さま』を 書いた サン＝テグジュペリは、その 童話の なかで 次のように 語る。
- (4) 人に ふまれていた 雑草が、人の ひざを 没するほどに 伸びた。

3 次の文の——線部の述語に対する主語をみつけ、——線をつけなさい。

- (1) 船の 汽笛が 港に ひびく。
- (2) 多くの 未来の 夢は とてつもなく 大きい。
- (3) 演奏の すばらしさが 完全に 人々の 心を とらえた。
- (4) その 光る 石ころこそ 求める 宝だった。
- (5) 日本の 飛行機も 世界中を 飛ぶ。
- (6) 山奥の 道には バスさえ 通らない。
- (7) 先生、優勝しました、ぼくたちの チームが。

4 次の——線をつけた述語に対する主語を答えなさい。主語のない場合は、「なし」と答えなさい。

- (1) 朝 起きて 見ると 外は 一面の 銀世界だった。
- (2) じいさんが 汗を ふいて 女の人の 隣に 腰かけた。
- (3) 山の 間に 小さな 湖があったので そこで 休憩した。
- (4) 西の 空に 広がる 夕焼けが 実に 美しい。

主語の省略

主語は省略されることもある。(わたしは) 行ってまいります。